

## 【資料】

## 現代の父親像(2)

—子どもに対する調査データーを

手がかりとして(註)—

高橋 宗

## 目 的

現代の家庭における父親の存在が希薄になってきたと言われる。昔は、家という形態を背景に父親像が作られていた。しかし、家族制度を含む価値体系の崩壊と家庭生活の平等化といった時代の変化は、父親像そのものにも大きな影響を与えた。1988年に行われた総務庁青少年対策本部の国際比較調査(1987)でも「父と子の接触時間の減少・子どもから尊敬されていると思う父親は、アメリカや西ドイツに比べて少ない・子どもの考えていることがわからない。」といった父親像が示されている。このように、父親の存在を希薄にしている問題の分析と対策が検討されなければならない。父親に問われる問題点は、(1)父親の存在が認められているか。(2)子どものことをよく知っている

か。(3)父と子の接触量。の三つの側面から検討される必要がある。著者は、最近、大津市唐崎学区にて「父親の子育て」に関する調査を行ってきており、これらの調査を通して現代の父親像に関する研究を進めて来た。

本研究は、その一環として唐崎学区の小・中学生を対象に実施した調査データーをもとに、父親と子どもの関係を明らかにし、それに促進的あるいは防害的に働く要因を統計的に明らかにする目的で行われたものである。

ところで著者は、父親像の分析を父親自身の調査については既に完了し、その結果(1987)を前回本誌に発表した。その際最も重要であると考えられた点は、父と子の基本的なコミュニケーションと父親の存在感、すなわち「対話」と「父親の権威」の関係について、分析し検討することの必要であった。その点から分析を進めた結果、(1)父親は仕事重視で多忙。(2)子どもとの対話が少ない。(3)子育ては母親まかせ。(4)子どものことは、よく知っているつもり。(5)父親の存在感は薄く、権威が低下してきている。といった現代の父親像が明らかにされた。大まかな表現をすると、「仕事が忙しく、子どもと接触する時間がないので母親にまかせている。子どものことはよく知っているつもりだが、対話不足から父親の存在意義は低い」といった条件が示された。このことからコミュニケーション量が、家族適応の安定化にとって重要な要因になると考えられた。これらは、父親自身が考える父親像の見解であるが、本稿では、

子どものみる父親像の諸要因について、子どもの生活意識の中からとらえ、父と子に関係する要因についての分析結果を報告する。

## 方 法

### 一、被験者

大津市唐崎学区の小学校、中学校の子ども達588人を対象とした。その内、無効データ数は23人。有効処理データ数は、1646人(98.63%)であり、その内訳は次の通りである。

小学校		中学校	
四年生	230人	一年生	329人
五年生	251人	二年生	314人
六年生	236人	三年生	286人
合 計	717人	合 計	929人

### 二、調査票の構成

調査項目は41。その内、生活環境を問うフェイスシートが3項目、子ども達の生活全体についてが20項目、父親についてが9項目、家族とのコミュニケーションについてが8項目である。

### 三、実験手続

調査は、小学校で昭和61年9月、中学校で昭和61年7月に実

施された。調査用紙は、各クラス担任を通して配布。回答後、ただちに回収した。

### 四、分析の方法

分析の仕方として①全体的集計分析と②数量的分析の二通りを行った。

①全体集計分析 … 全調査項目について得られた588人のデータの単純集計を行い、子どもの生活状況や意識等を全体的にとらえた。

②数量的分析 … 子ども達の生活意識と父親像の関連性を明らかにするために、相関分析と数量化理論Ⅱ類を用いて検討した。

### 五、変数の選択

相関分析及び数量化理論Ⅱ類を実施するにあたり、フェイスシート(3項目)と名義尺度を用いた質問形式(9項目)を分析データから除いた。分析を行う際、相関分析では、重複していると考えられる質問(1項目)を除いた28項目(表Ⅰの変数参照)で実施した。また数量化理論では、表2、3で示す18項目にて分析を行った。

## 結 果

### 一、全体集計分析

各質問項目への解答を分析し、それらの特徴をまとめると次のようなことが明らかになった<sup>(注)</sup>。

#### 〔生活環境と意識〕

両親と子どもといった核家族世帯が74%。子ども達の起床時間は、午前七時頃であり、就寝時間は、小学生が八時〜九時、中学生が十一時〜十二時頃となっている。家に帰ってからの勉強時間は、平均三十分〜一時間であり、塾に「行っていない」は、半数近い44%である。行っている場合では、一週間に二日〜三日が一番多く、中学生になるほど増加の傾向が見られる。T.V.を見る時間は、一日平均二〜三時間で、54%と半数を占めている。テレビゲームについては、「もっていない」「少ない」を合わせると60%となっており、子ども達の関心が、少し薄くなってきているようである。家に帰った時、お母さんにいつも家においてほしいと思う子どもは53%。とくに小学生では68%と半数以上である。いなくてよいと思う子どもは10%未満で、大半の子どもが母の在宅を望んでいる。しかし、夕食を家族全員でとるのは半数。しかも、食事中にはT.V.がついており、対話もあまりしていない傾向を示すなど、家族同志のコミュニケーションの場が少なくなってきたことを示している。このよ

うな結果は、前回父親に実施した調査結果とほぼ同様の傾向であった。又、子ども達の半数以上が個室を持ち(83%)、アイドルがいる(64%)。大人は自分勝手だと66%の子が思っており、周囲で一番おそろしい人は、いない(33%)が、父親(29%)、母親(14%)をこえている。友達になりたい人は、やさしく親切な人(69%)。大人になった時の一番の望みは、中学生では好きな仕事をしたい(49%)、小学生では、社会の人のためにつくすこと(35%)と述べている。そして早く大人になりたいと望んでいる子どもは46%で、小・中学生とも今のままの方がよいと思う気持ちとが同率であった。子どもの中で、「勉強がイヤになる」と思う子ども達は82.3%と高い比率を示す。特に中学生では、86.7%と高く、現在の中学生達が置かれている受験環境の立場を明らかに示していると言える。それを反映するかのよう「毎日がつまらない」と思っている子ども達は、38.4%と1/3を占めている。特に中学生は42.2%と半数近くまで感じており、中学三年生になると六割(図1)を占めている事が判る。その事は、自殺を考えた事がある(30.4%)といった問にまで同様の傾向として示されている。この自殺を考えた事があるといった傾向は、図2に示されるように小学生でも比較的高い。とくに小学校六年生と中学校三年生とは、ほとんど変わらない点が特徴である。このことは、卒業のような学年の大きく変化する時期に、子ども達が不安定な感情状態になると考えることができる。

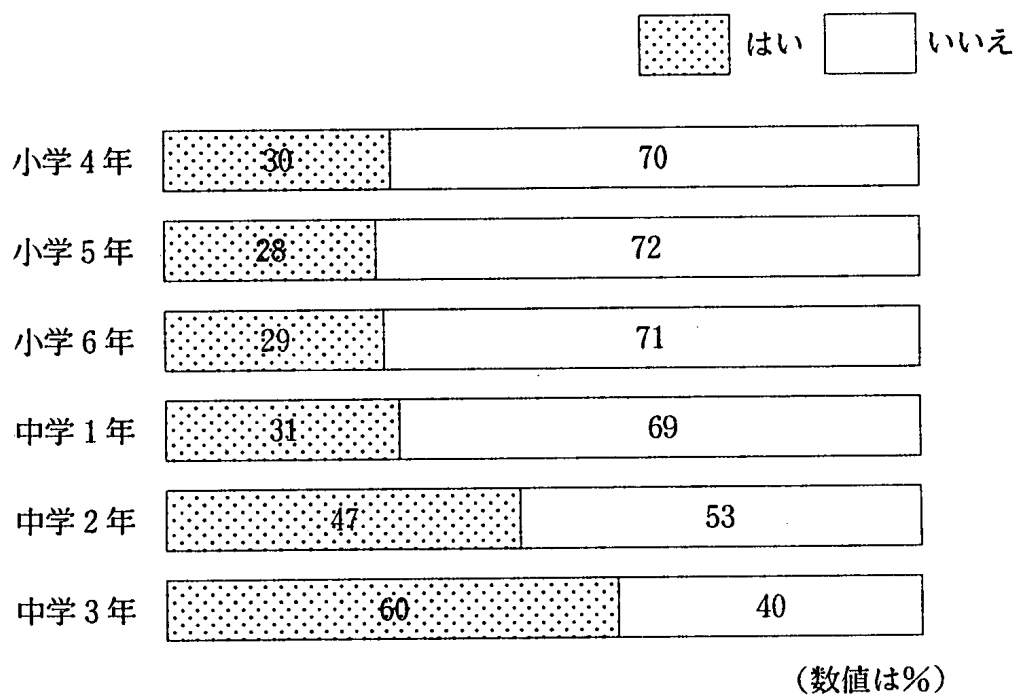


図1 「毎日がつまらないと思うか」の問に対する学年別結果

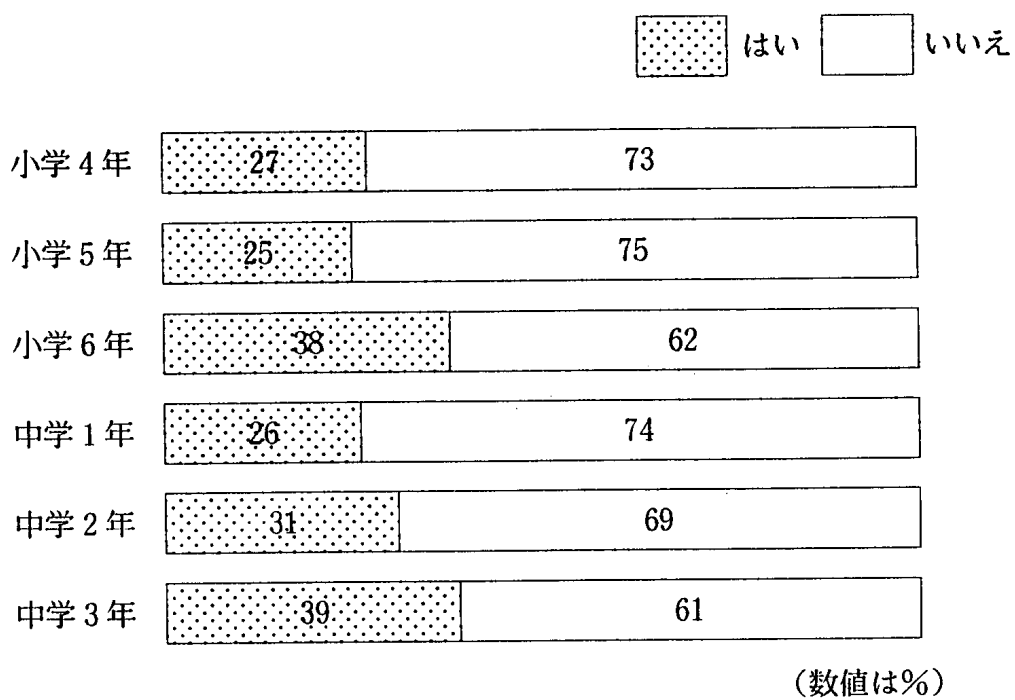


図2 「自殺を考えたことがあるか」の問に対する学年別結果

〔父親について〕

父親が家の中で一番えらいと思っている子どもは45.7%。思わないが14.6%。残りの34.7%が、どちらともいえないの中間派。それでは自分の父親を尊敬できるかについては、出来る29.9%、出来ない20.7%、ある程度出来るといった中間派は、44.7%であった。この結果を、父親自身に行った調査と比較すると、父親の思いとして「自分のことを誇りに思っていてくれる(72.7%)」といった考え方は少しずれているが、父親が考えているほど権威が低下した(63.2%)と、子ども達は見ていないようである。

子ども達がみる父親のイメージは、まず第一番目に、一生懸命働く父(41.9%)の姿を描いている。この姿は、父親自身が描く場合(35.7%)と大きな差は見られない。しかし、二番目には、「やさしい父」や「陽気な父」といったイメージを子ども達ももっているのに対し、父親自身は、「厳しい父」であると考えており、違いがみられる。ただ中学生においては、短気であると評価する傾向も多く見られる。このような父親をタイプで見ると図3の通りである。前回調査の父親自身による結果とは大きくずれており、アメリカ青年型になっている(1984)。ただアメリカ青年の場合とは異なり、子どもに対し友人のように接してくれることを求める傾向が高く見られた。この傾向は、父親を尊敬できない子どもほど父親の考えに従わされる事をい

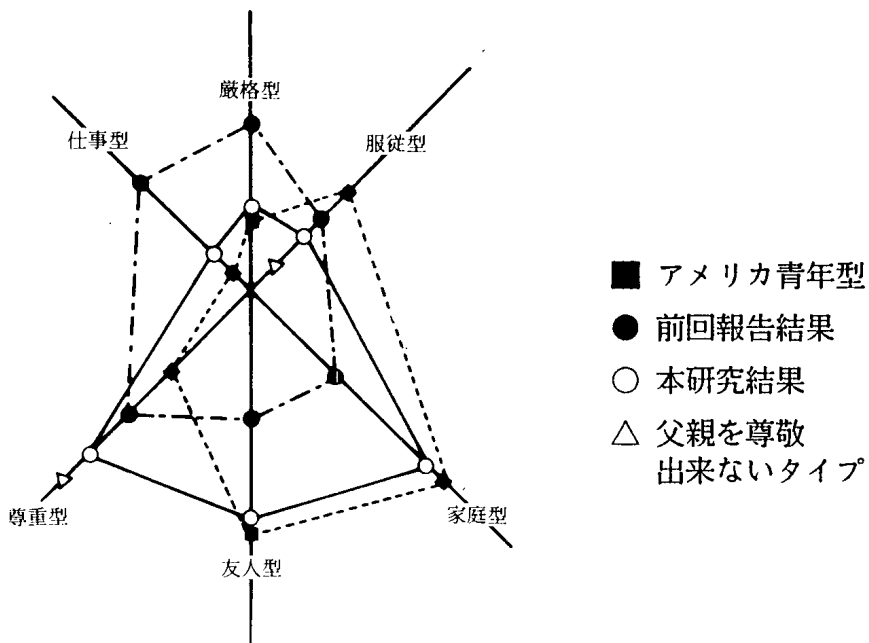


図3 子どもが考える望ましい父親のタイプ

やがり、子ども自身を尊重してほしいと強く望んでいる(88.5%)。

子ども達のことを、どれだけ知ってくれているかといった学校生活、悩み、将来の夢に対する父親の熟知度をみてみた。前回の調査で父親は、学校の様子については88.1%が知っているとしたが、子ども達から見ると71.5%と減少し、中学生になると、66.7%になる。子どもの悩みについてはもっと明確で、父親としては半数(55.5%)以上が判っている、であったが、子ども達は逆に64.8%が知らないだろうと考えている。将来の夢についても同様に51.3%の子ども達が、父親は知らないだろうとし、父親の考えとは逆の結果になっている。これらの傾向を更に父親を尊敬している子どもと、していない子どもとの評価を比較してみると、図4の通りであった。すなわち子どもが父親を尊敬している場合、より明確な評価として示された。

コミュニケーションの場合、より明確な評価として示された。食事をとる機会は平日で50.3%、それに対して78%の父親は、平日でもともに夕食の機会があるとしている。食事中の対話は、いつもするが25.7%、しないが27.9%、中間派が46.6%と父親が思っているほどには、対話ができていると子どもはみている。食事中のT.V.については88.4%がついているとしており、父親と同じ傾向を示している。平日の父親とのコミュニケーションとして子どもが相談する機会があるかを問うと、父親の88.9%があるに対し、子ども達は49.1%と半分近くに減少し、父親

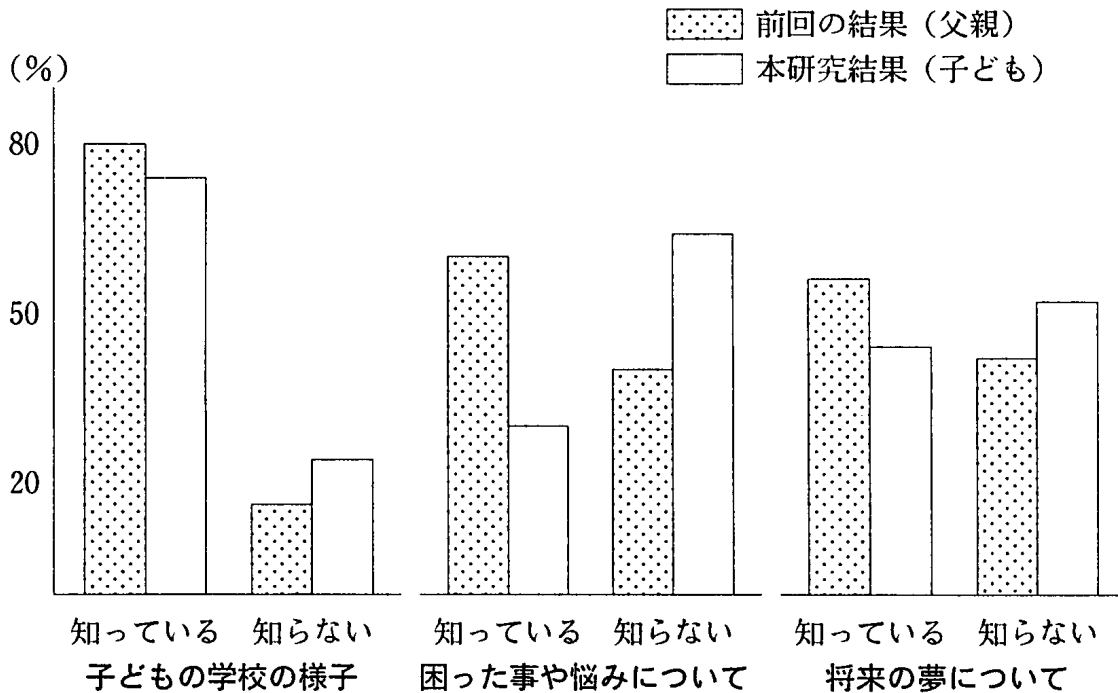


図4 「子どもの生活について、父親がどれだけ知っているか」に関する熟知度の比較

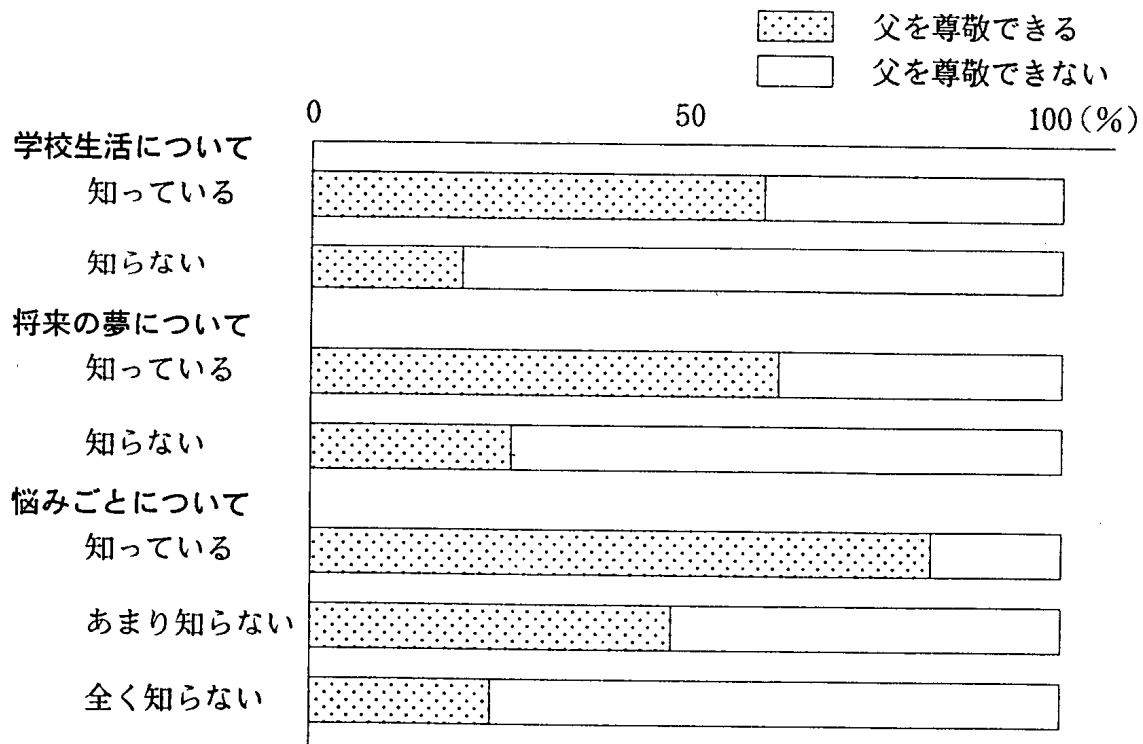


図5 「父親が子どもについてどれだけ知っていると思うか」に関する子どもの反応

と子どものずれが目立った。特に父親を尊敬できない子どもは、32.2%台まで減少を示している。更に、子ども達の相談相手は誰かといった事について、父親自身は「母親である」と考えているのが78.2%を占めていた。しかし、子ども達自身が母親であるとするのは、32.4%と低く、友人(32.3%)や一人で考える(23.4%)といった状況が半数以上を占め、父親が考えているのとは、大きなずれが見られた。特に中学生では、友人を相談相手にあげるものが29%と半数近くを示しており、この年代での交友関係の重要性がうかがえる。それに対して母親には21.2%の子どもが相談するが、父親には29%と極端な結果を示している。又、小・中学生とも一人で考えるが20%台を占め、現代の子ども達の「孤立化現象」も見られる。このことは、なぜ相談しないかの理由として「特に話す必要がない(34.4%)」を小・中学生ともトップに挙げている事でも裏づけられる。このような結果で示されるように、父親と子どもの認識のズレが、父子の間でのコミュニケーションが形成できない現象を生み出していると考えられる。

夕食時に十分なコミュニケーションがとれているかどうかによって、両親に注意された時の気持ちに差が見られる。話し合いが十分できないタイプは注意されると、だまっていたり(39.7%)、けんか(35.0%)になる傾向が高いが、話し合いが十分になされているタイプは反省する(52.2%)傾向が高くなる。同様に「父親が家で一番えらい」とする子ども達の半数以

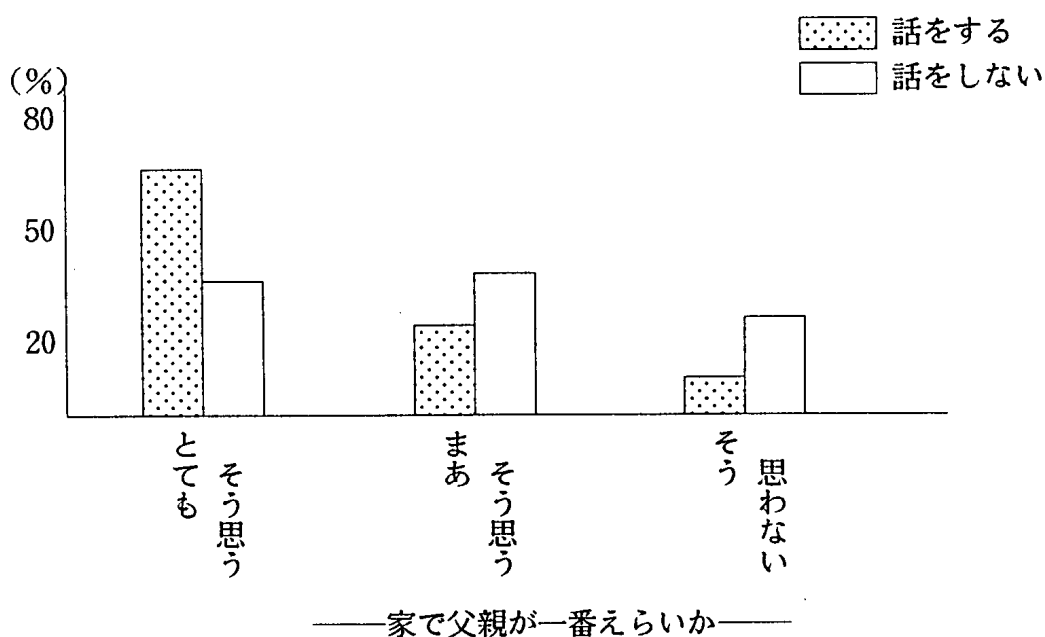


図6 「夕食時話をするかしないか」による家庭での父親の存在感

上(64.8%)が夕食時の対話をよくしている(図6)。それに対し、夕食時のコミュニケーションが不足している子ども達は、勉強が嫌になる(86.2%)・大人は自分勝手である(74.7%)・毎日がつまらないと感じる(50%)・自殺を考えた事がある(34.4%)といった項目において高い比率を示している。このようにコミュニケーションの有無が、子どもの日常生活を大きく変える要素になっているといえる。

## 二、数量的分析

表1は、変数間の相関をみたものである。0.3以上の相関がある変数を見てみると、まず「父を尊敬できるか」という変数と他の変数との間に高い相関がみられる。たとえば「家で父が一番えらい」といった変数の間には0.5831。「夕食時に話をするか」が0.3127。学校生活、悩み、将来の夢といった子どもへの熟知度との間にも0.3以上の相関がみられた。また「平日に父に相談する」といった変数との間には、0.2974。「注意された時の気持ち」との間には、0.2583とやや低い相関が、変数間に有意( $p < 0.5$ )な関係が見い出された。「子どもの悩み事への熟知度」についての変数では「夕食時に話をする」(0.3246)・「平日に父親に相談する」(0.3448)・「家で父が一番えらい」(0.333)・「父を尊敬できる」(0.3869)といった変数間で高く、さらに父親による「子どもの学校生活への熟知度」(0.3592)・「将来の夢への熟知度」(0.3459)においても相関が高いことが



判った。又、「夕食時に話をするか」といった変数では、子どももの「悩みへの熟知度」と「父を尊敬できるか」で高い相関がみられる。ただ0.5以上ではないが、「平日に父に相談する」や、「学校生活への熟知度」等にもかなり高い相関がみられる。これらの結果をみると、「父を尊敬できるか」「悩み事への熟知度」それに「夕食時話をするか」の3変数間に、高い相関がみられ、お互いがなんらかの形で関係し合っている項目と言える。しかしながら、これらの変数は他の一般的な生活環境の変数とは相関が余り高くないことも明らかにした。すなわち、父親の存在感と子どもの悩みやコミュニケーションとしての話し合いといった要因とでは関係が深い。しかし、子どもの自殺のような問題とでは、直接的な関係を見出すことはできなかった。そこで、これらの関係を更にくわしく検討するために、「子どもを尊敬できるか」と「夕食時に話をするか」の2変数をそれぞれ目的変数とした数量化Ⅱ類の判別分析を行った。

表2は、「父親を尊敬できるか」における数量化分析Ⅱ類の結果、得られた各変数のカテゴリ・ウエイト、ウエイト最大最小差（レンジ）である。相関比は、 $\mu=0.67$ である。カテゴリ・ウエイトの正負は、判別関数軸の（+）（-）の方向に対応している。従ってカテゴリにおいて正のウエイトは「父親を尊敬できる」に寄与する要因、負のウエイトは妨げる要因と考えられる。これらの結果から、寄与率の高い4変数について検討してみたい。

父親の家庭での存在 … 家の中で父親の存在が非常に高い場合、父親を尊敬する目安となる。しかし、判別分析では、中間的な反応に対しては負のウエイトを示しており、家の中の存在感が少しでもゆらげば、すなわち父親の権威の低下に関係することを示唆している。

夕食時の対話 … 日常生活の中でのコミュニケーションの場として考えられた夕食時の対話は、第3カテゴリ以外正のウエイトを示している。このことは、日常におけるコミュニケーションが十分になされていれば、父親の存在感を高める働きがあると言える。

悩み事の熟知度 … 子どもの悩みに対する熟知度が高いほど父親の尊敬度に対する寄与率が高くなっている。それは第2カテゴリでも正のウエイトを示していることから、「悩みを知らうとしているか、いないか」といった姿勢そのものが、父親の存在感に関与していることを示している。ウエイト差では低い将来の夢や学校生活への熟知度でも同様の傾向がみられる。ただ悩み、夢、学校生活といった三つの側面では、判別分析の結果、悩みに関する変数の寄与率が一番高いと言える。

家での勉強時間 … 第2、第3カテゴリといった低い水準ほど、父親を尊敬する寄与率が高いことを示した。これに対する確かな根拠は、見い出せない。しかし、子どもにとって勉強といった嫌な事に対する父親の干渉が少ない条件、すなわち勉強時間の少ない水準が父親に対する存在感を高めるように働いて

表2 数量化Ⅱ類による判別分析

変数	カテゴリー	反応数	カテゴリーウェイト	レンジ
家で父が一番偉いか	1	398	0.1834	0.5076
	2	198	-0.1476	
	3	135	-0.3242	
夕食時話をするか	1	215	0.0434	0.1499
	2	316	0.0378	
	3	200	-0.1065	
悩み事の熟知度	1	65	0.0792	0.1361
	2	202	0.0871	
	3	464	-0.0490	
家で何時間勉強しますか	1	51	-0.0339	0.1357
	2	374	0.0139	
	3	306	0.1018	
注意された時の気持ち	1	318	0.0543	0.0995
	2	229	-0.0451	
	3	184	-0.0377	
将来の夢の熟知度	1	203	0.0431	0.0885
	2	172	0.0430	
	3	356	-0.0454	
学校生活の熟知度	1	218	0.0278	0.0878
	2	313	0.0190	
	3	200	-0.0600	
平日父に相談するか	1	163	0.0138	0.0756
	2	229	0.0412	
	3	339	-0.0344	
母に家にいて欲しいですか	1	409	0.0299	0.0679
	2	322	-0.0380	
一日何時間T.V.を見る	1	332	0.0098	0.0586
	2	333	-0.0179	
	3	66	0.0408	
毎日何時頃に寝ますか	1	174	-0.0104	0.0399
	2	452	-0.0029	
	3	105	0.0295	
週何日塾に行きますか	1	89	-0.0254	0.0387
	2	237	-0.0132	
	3	405	0.0133	
T.V.ゲーム何時間する	1	84	-0.0225	0.0301
	2	212	-0.0076	
	3	435	0.0006	
父の考えに対して	1	188	0.0061	0.0239
	2	543	-0.0177	
毎日何時頃起きますか	1	204	-0.0106	0.0208
	2	511	0.0039	
	3	16	0.0102	
家庭と仕事	1	130	-0.0154	0.0187
	2	601	0.0033	
食事中にT.V.を見るか	1	300	0.0017	0.0157
	2	300	-0.0060	
	3	131	0.0098	
子どもに対しての父	1	194	-0.0067	0.0092
	2	537	0.0024	

表3 数量化Ⅱ類による判別分析

変数	カテゴリー	反応数	カテゴリーウェイト	レンジ
食事中にT.V.を見るか	1	324	-0.0605	0.2186
	2	300	-0.0064	
	3	136	0.1582	
父を尊敬できるか	1	245	0.0882	0.1983
	2	317	0.0006	
	3	198	-0.1101	
悩み事の熟知度	1	61	0.1298	0.1754
	2	194	0.0777	
	3	504	-0.0455	
平日父に相談するか	1	184	0.1014	0.1582
	2	206	0.0113	
	3	370	-0.0567	
母に家にいて欲しいですか	1	402	0.0662	0.1406
	2	358	-0.0744	
将来の夢の熟知度	1	189	0.0890	0.1372
	2	155	0.0207	
	3	416	-0.0482	
毎日何時頃に寝ますか	1	158	0.0592	0.1181
	2	481	-0.0046	
	3	121	-0.0589	
学校生活の熟知度	1	216	0.0390	0.0994
	2	327	0.0144	
	3	217	-0.0605	
毎日がつまらない	1	294	-0.0569	0.0927
	2	466	0.0359	
週何日塾に行きますか	1	83	-0.0524	0.0778
	2	250	0.0254	
	3	427	-0.0047	
大学まで親の義務	1	210	-0.0548	0.0758
	2	550	0.0209	
一日何時間T.V.を見ますか	1	319	-0.0197	0.0497
	2	373	0.0114	
	3	68	0.0300	
注意された時の気持ち	1	296	0.0243	0.0494
	2	261	-0.0081	
	3	203	-0.0251	
家で何時間勉強しますか	1	57	0.0322	0.0492
	2	403	0.0080	
	3	300	-0.0169	
勉強がイヤになるか	1	616	-0.0087	0.0461
	2	144	0.0373	
自殺を考えた事がある	1	231	0.0125	0.0179
	2	529	-0.0054	
大人は自分勝手	1	503	0.0053	0.0155
	2	257	-0.0103	
早く大人になりたい	1	323	0.0074	0.0129
	2	437	-0.0055	

たのではないかと考えられる。

表3は「夕食時に話をするか」における数量化分析Ⅱ類の結果で、相関比は $\chi^2/df=5.05$ である。この変数に寄与する要因を判別分析からみてみると、「食事中にT.V.を見るか」「父を尊敬できるか」「悩み事や将来の夢に対する熟知度」「平日父に相談するか」「母に家において欲しいか」などの変数が考えられる。とくに、食事中のT.V.は、第1、2カテゴリーでは負のウェイトになっており、T.V.は対話を妨げる重要な要因であることを示唆している。さらに父親を尊敬していることや、平日に父と話が出来る事、また母親が家にいることなどが、重要な要因になっていることが判別分析のウェイトの与えられ方で判る。

#### 考 察

ここでは、小・中学生の生活意識調査に基づいて、子ども達のみる父親像を全体的集計によって分析し、それを裏づけるための統計的吟味を行った。統計的吟味を実施するために分析可能な29変数を抽出した。

29変数間の相関により、最も関連性の高い変数は「父を尊敬できるか」と「夕食時に話をするか」「悩み事への熟知度」が示され、全体集計の結果とほぼ一致していた。それに対し、子ども達のもつ父親像と生活全般的な考え方との間には、必ずしも関連性があるとは言えなかった。

そこで、全体集計でも重要な要因と考えられた「父を尊敬で

きるか」と「夕食時に話をするか」の二つの側面に分けて、29変数との関係を検討してみた。林の数量化Ⅱ類による判別分析の結果は、全体集計の結果を裏づけることができた。

子ども達のみる父親像の中で、父の存在を認める要因として指摘された条件は、以下のものである。「父親をいつも一番偉いと思っている事・父親が子ども達の悩みを少しでも知っていること・家での勉強時間について余り干渉しないこと。」

逆にこれらの条件に欠けることは、家での父親の存在感が低くなることである。すなわち子ども達の尊敬の対象になりにくく、父親の権威も低下することになる。

次に家庭内で、豊かなコミュニケーションが存在するための要因として、考えられる条件は次のようなものである。食事中にはT.V.を絶対に見ないこと・父親に対して尊敬の気持ちが多量とも存在すること・子どもの悩みごとや将来の夢について父親が少しでも知っていること・平日でも、父親に相談できるゆとりがあること・母親が働きに出かけずに家にいること。

これらの条件が欠けている場合には、家庭内におけるコミュニケーションが不安定になりやすいと考えられる。

前回の父親自身の結果では、子ども達の基本的なコミュニケーションの不足が、家庭内での権威の低下を生じさせる要因であると考えられた。本研究では、それを検討するために、子ども達の生活意識を通して父親像を明らかにすることであった。その結果は、父親自身が考えている父親像とは、現象的に異なっ

ている側面が見られた。しかしながら、それらの基になっている条件は、父と子、あるいは家族とのコミュニケーションの要因が強く寄与していることが統計的にも示された。従って父親像を決定づける基礎的条件は、父親の立場でも子どもの立場でもほとんど同じ傾向にあると言える。父親が考える親子の接触量の不足は、「現代の日本社会が仕事を重視する」といった、物理的な時間の不足を原因に挙げていた。しかし、その点に対して増田(1985)は、「日本の家庭には、これまで対話の伝統がない」と指摘し「以前には対話があったのに、最近親子の接触が減ったので対話が不足してきたと思っている人があるようだが、それは錯覚である」と述べている。すなわち、日本の家庭には昔から規則やままりはあっても、対話の状況がなかったのである。だから近代国家になって、父親の仕事場が家からはなれてしまったから、物理的な接触量が減少したという理由では解決ができないのである。もともと形式を重んじていた日本の家庭では、対話をする雰囲気や土壌がなかったともいえる。増田によれば、対話は「家族のそれぞれが、家庭づくりを指す役割分担を通して行われる」のであろう。家族の一人ひとりが家庭設計のために役割と目標をもってこそ、話し合いが必要になってくるのである。家族の各成員がゲストのような性格を持ち出した時、家としての対話の必要性はなくなるのであろう。父親は「子を理解しているつもりだが、仕事が忙しく対話の時間が不足しているので子どものことは判らない。」と嘆き、

子どもは「父が、自分の悩みなどを十分に理解してくれない。話す機会もない。毎日がおもしろくない。」と不満をのべながら家族がそれぞれ自己の内に閉じこもる。そこには岡堂(1986)のいう「家族が相互に情報を交換しながら共有の目標を達成する」といった姿はみられない。したがって、コミュニケーションの必要性が生じて来ないのである。家の機能として共通の目標が失われた時、対話の必要性は低下し家族間の結合も低下する。それは、家族成員の役割機能の低下を意味するものでもあろう。すなわち、「家族不適応」の始まりであり、家族崩壊を示唆していると考えられる。その意味でも、J・クスマノ(1987)が述べるようなファミリー・ミーティング(家族集会)が日本の家庭にも必要な条件になってきている。

#### 要 約

本研究では、父と子に関する要因の分析結果報告した。対象者はいずれも大津市唐崎学区の小・中学生のお人である。これらの対象者が示す父親像を概略し、さらに「父を尊敬できるか」と「夕食時に話をするか」という項目で、林の数量化Ⅱ類によって判別分析を行い検討した。変数は、父親に関するものと一般的な生活意識に関する28変数である。

判別分析によって、「父を尊敬できるか」と「夕食時に話をするか」に寄与する変数を選び出して父—子関係の要因を探った。その結果、父—子関係を高める要因として次のような点が

指摘された。父親をいつも偉いと思っている事・夕食の時には少しでも話をする・子どもの悩みを知っている事・食事中にはT.V.をみない・平日に相談できるゆとりがある・母親が家にいることなどである。これらの条件の基になっているものは、コミュニケーションの要因であり、父親の立場でも子どもの立場でも同じであり、家族適応の安定化に重要な要因であることがわかった。

#### 引用文献

- (1) 岡堂哲雄「あたたかい家庭」—『講談社現代新書』1986, p66—p69
- (2) J・クスマノ「外国人からみた現代日本の家族」—『児童心理』, 41の1』1987, p69—p77
- (3) 総務庁青少年対策本部「日本の父親と子共—アメリカ・西ドイツとの比較」—1987, p13—p109
- (4) 総理府青少年対策本部『日本の青年・世界青年意識調査(第二回)報告書』1984, p12—p15
- (5) 高橋宗「現代の父親像(1)—父親に対する調査データを手がかりとして—」—『聖隷学園聖泉短期大学・人文・社会科学論集』1987, 1, p102—p124
- (6) 増田光吉「親子の接触」—『NHKブックス101』1985, p74—p77

(注1) 本論文の一部は、1987年10月、日本教育心理学会第29回総会にて発表した。

(注2) この調査における集計結果の数値等の子細なデータに関しては、「生活意識に関する調査集計結果報告書」(聖泉短期大学心理学研究室)を参照されたい。